

山と博物館

第23巻 第6号

1978年6月25日

大町山岳博物館



ヒヨドリ

撮影 北原正宣

歩行観想

昨年暮れに博物館の近くに住居を越してきた。爾来朝の歩行のコースが決まって博物館の庭までか、これを通り抜けて霊園から松崎に下るコースを採るようになった。芽吹き頃には骨ばって見えたまわりの樹々も、桜花の白、山吹きの黄、つつじの紅とうつろいで今では深い緑の衣に身をつつんで静まり返っている。朝早いせいもあるが、実にすがすがしい、とくに近頃は野鳥の数が多く目立ち、たまにはテンカリスなのか小動物まで現れては目を楽ませてくれる。こんな早い時間でももうタクシーで上ってきて、コマクサ園あたりを観ている旅の人に行き合ったり、私と同じトレパン姿の人たちに出合ったりする此頃である。立派に育った庭の白樺の樹々、その向こうに博物館は老体を横たえている。老朽というにピッタリの建物である、そんな博物館にも近頃また改築の話がもち上ってきた。長い間に集められた資料や標本、これら研究の糧をより効果的に活用させるためにも、一日も早く改築を望みたいし、この美しい環境の中にマッチした瀟洒な建物が欲しいと思う。一方こんな機会に出でくるもう一つの話はきまって中味のことである。せっかく手掛けている雷鳥やカモシカの特別事業も、その拡充と推進が叫ばれながらも人手不足と財源難がブレーキとなつてままならないのが現状である。しかし、だからといって「国が県へ移管してしまえばいい」とか「もつと広くて交通至便な処へ引越せばいい」などという早計な考えはしたくない。いまはたとえ苦しくてもどんなに手狭でも、この高台から見るとこの街に、私たちのこの博物館ありと思いたいからだ。これはまた先達者の願いでもあったはずだし、また市民の誰でもが何時でも胸をはって案内できる唯一の街の宝でもあるからだ。

(山本携筆)

大町市来見原の出土品

原田 暁

大町市大町三日町の来見原一帯が、いよいよほ場整備事業の着手と決定されたので、この水田地帯について予備調査を行うという話のあったのは、北アルプス連峰が未だ一面の雪に被われていた昨年三月のことである。

予備調査とは、この地域に古い遺跡があるかどうか、今迄に出土品がなかったかどうかなどを探り、それに基いて本調査の計画を樹てるもので、大町市の編成した調査団によって行われたのである。

この年の三月二十五日の予備調査によって、出土品が得られたので、同年十月八日と九日及び十六日には緊急発掘調査が行われ、これらに前後して同地一帯の動植物や、地質土壌などの調査も進められたのである。

私の関係した考古学上の調査では、中世の道路と考えられる遺構が発見され、遺物としては土器類が出土したのであるが、この出土品について少し述べて見たいと思う。

大町の弥生式土器とその文化(第一図)

弥生式文化とは日本列島に稲作りをもたらし文化であると説かれて来た。事実各地から発見される遺物を見ると、農具などを造る工具としての磨製石斧を始め、稲穂を摘む石庖丁や、それ自身が畑などの農耕具と見られている打製石斧(鉞形)がそうした説を証明するものとして素直に受入れなければならぬものと思われる。ここで大町地方の場合に、弥生式文化がどの様に波及していたかということ、実は今迄の所全市に及んだ調査が進んでいなかったこともあって、予備知識に欠けるのであるが、この中で、市の東南部の社地区については、先年のこと松本市の深志高等学校地歴会の人達によって松崎古城遺跡の発掘調査が行なわれ、堅穴住居址一つを完掘し、土器片多数と磨製石斧三、打製石鏃三と磨製石鏃四、管玉二と白玉一、石錘一、石庖丁一などの他、用途不明の鉄器一が発掘さ



第一図



来見原の発掘(昭和52年10月9日)

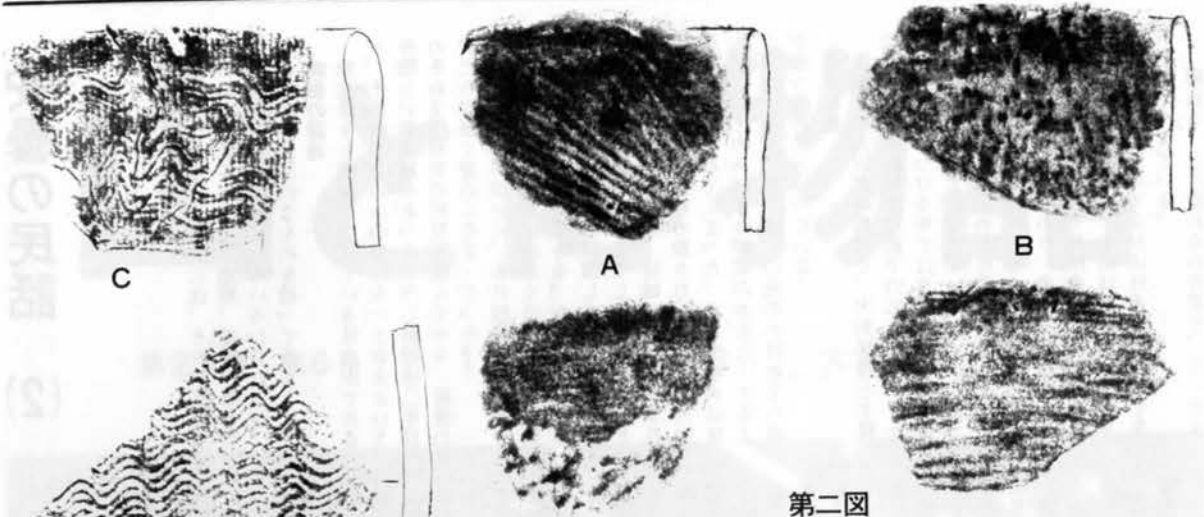
もっとも弥生式中期末に、松本地方で百瀬式という土器の文化が地域的に栄えており、下伊那地方では北原式の文化があつて、後期弥生式文化にそれぞれ引継がれるのであるが大町地方としてはこの点についての移行の姿ははっきりしたものがなかったのである。そこで私は先日のことであるが松崎古城へ行き、約三〇分間この遺跡を歩いて見たのである。

一帯は手入れの届いた畑であるが、畑の中の小道を伝いながら採集した土器片は十九を算えて、その中の五つは赤く塗彩された美しいものであつた。これらは何れも弥生式後期のもので、北信地方で箱清水式と呼ばれている形式のものである。これらを見ると、古城遺跡に住んだ後期弥生人は、周辺の低湿地で稲作りを

れている。土器は櫛目文を盛んに描いたものが多く、長野県では弥生式後期とされるものである。この時代の遺跡は松本平一帯に確認されているもので、大町市ではこの松崎古城周辺から南にかけて、土器が発見されているようである。そこで、考えられることはこの時代に急速に遺跡が多くなるという原因であるが、それより前の弥生式中期の文化についてもはつきりした遺跡が少なく、当時の生活環境が、弥生式中期とその後期では相当異なっていたのではないかと見られるのである。

更に大切な種子なども入れて貯蔵したらしいのである。こうした生活は当時の一般的なものであつたと思われ、それまでの生活は山麓に居住することが多かったのに比べ、低い台地へと進出し、それも南から北へとそれぞれ生活域を広げていったものと考えられる。大町地方では農具川沿いの一帯がまず対象地となつたものであろう。

ここで注意したいことは、大町地方はもとより、南信の伊那地方においても弥生式後期になると遺跡の数は急増しており、農耕社会

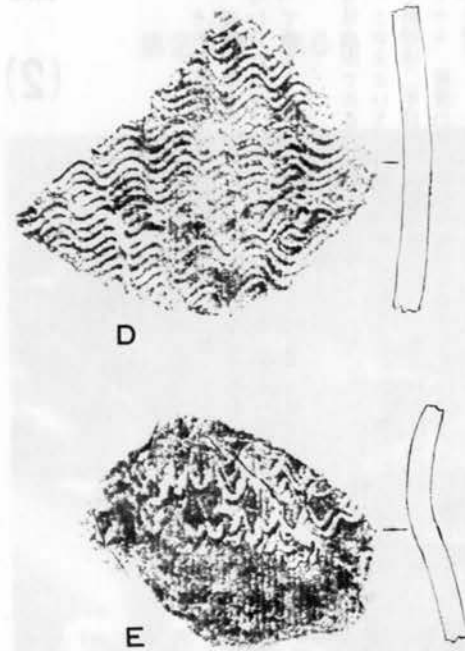


第二図

の発展と見られるものの、理由には稲の品種改良によると見る人が多いが、私としては、品種改良もその一つであるけれども、もう一つ大切な問題としては、気候の温暖化によって稲の生育条件が過年的によくなつたのではないだろうか、と考えているのである。これは今後検討される大事なこととして、今はこれ以上触れないこととする。

弥生式中期の土器(第二図)

来見原の北端に近い地下一メートル程の所で、中世の道路と思われる集石が発見され、その石の更の下から細かく割れて出土したもので、第二図Aが口縁部の破片である。上が表面で下が内面である。表面は先ず櫛歯状器具にて軽く横に条痕を描き、次に口縁から下方に斜めに深い条痕を付けてある。内面の文様は同様の条痕を浅く横走させたもので、他に同時に出土した破片も同一個体と思われる様に、表面は磨滅していたが、内面は同様の条痕が横走していた。



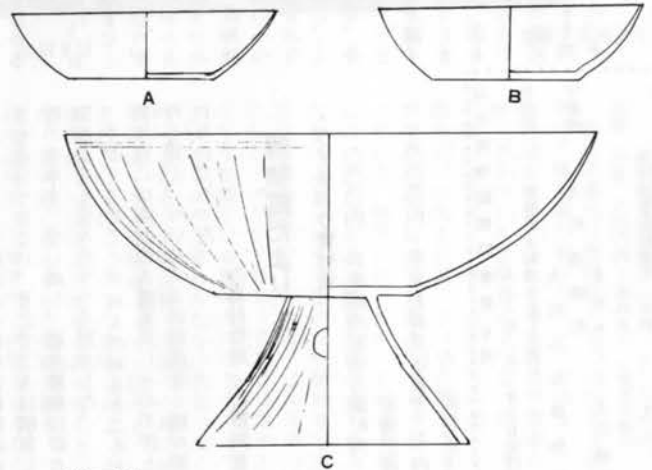
第三図

この土器は弥生式中期でも早い形式に属し、東海地方に文化の発生を持っていて、長野県には伊那谷經由で入って来ていると考えられている。一般的に条痕文土器とも呼ばれ、各地の出土名を名称としているものもあるが、大町地方では今迄知らなかった新しいタイプである。所が昨年十一月に私の調査した大町市平地区のコボレ沢遺跡で、縄文式晩期終末及び晩朝直後形式と考えられる土器が相当数発見され、現在整理中であるが、この中に来見原のものと同く似ている土器片が混在しており、参考の資料としたと思う。この土器は第二図Bがそれで、表面に煤が着いていて、文様の剥落が多いが、Aと同様条痕を斜めに描き、又、内面はやはり条痕を横走させているのである。器形や大きさもAとBはほとんど同じものである点に私は非常に興味を持ったのである。こうしたものを見ると、大町市の地域に弥生式中期の文化は到達していたことで、それを受入れた人達は恐らくこの地方に古くから住んでいた所の、縄文式土器を使用していた人達であったことである。

弥生式後期の土器(第三・四図)

第三図CDEは何れも櫛目文を多く描いた土器で、後期の箱清水式に相当するものである。第四図Cは弥生式後期末の柳町式に相当する高杯で、表面は刷毛目による整形文様が浅く見られ、器台に三個の円形孔をあけてあり、特別な用途に使用されたものらしく、予備調査で深さ約七〇センチメートルから発見され、大破していたものである。

土師器(はじき)(第四図)



第四図

5 10cm

第四図AとBは土師器の杯であり、同じくは土師器の類が一番多かったが、その中の大形破片を作図したものである。底は平底で糸切底であってロクロ整形による。一点表面に墨書の一字あるものが出土したが、うすれて判読出来なかつた。これらは平安時代末期のものと思われる。

(大町市文化財調査員、
長野県考古学会員)



安曇の民話 (2)

四、地名のいわれ

現在呼ばれている地名には、それぞれ理由といわれがある。歴史、地形、地質、事件、人物名など分類すればいろいろに分れるが、その中から民話的なものを拾ってみよう。

焼岳の涙

焼岳は今も噴煙を上げている活火山であるが、その昔、この山の麓に太一とお文という仲睦い若夫婦があった。然し結婚後二年目の冬お文は双児の死産を産んでから、産後の肥だちが悪く寝込んだまま、だった。

ところがその頃から、あれ程仲の良かった夫太一の態度が次第に冷たくなってきた。太一に情婦ができたのである。お文は、いたしかたないこと、健康を快復して昔の容色にもどれば夫の気持ちも変わるでしょうと、じつとがまんした。が、ある夜、情婦にそ、のかされた夫の為に太一は締め殺され、焼岳の噴火口深く投げ込まれてしまった。やがて噴火は休止し、もとの火口には紺碧の水をた、えるようになったが、里人はこの池の水はお文の涙が溜つたのだといっている。

かくね里

鹿島川の大川沢の奥深く、天狗尾根と主稜に囲まれた鹿島槍北壁直下の広い谷は、なかなか人の寄りつける所ではないが、こ、は昔から「隠ね里」と呼ばれている。

それは昔源氏に追われた平家の落人がこ、に隠れ住んだと言われるもので、山麓の鹿島部落はその後裔といわれ、昔から戸数は十一戸を守り通し、分家や他所者の加入を認めない特殊な村である。水田は全体で三ヘクタール程しかないので全戸山仕事に従事して生計をたて、きている。

「隠ねる」とは隠れるの方言で、こ、では

長 沢 武

武家社会の陰語がそのま、生きていて、馬を止める時はドー(動)歩かせる時はシ(止)と号令をかけたらしい、相手を呼ぶのにワレ(我)といひ、「さあワレも山へ行かす」(さあお前も山へ行こう)などと言っている。

六せみ滝

今では登山コースも変わって白馬鍾温泉への道は、そこを通らなくなりましたが、昔は松川南股沿いの道がもつぱらであって、温泉から南股の湯ノ入沢に沿って二*。程下った所にある大きな滝を六せみ(六左衛門)滝と呼び、コース中の名所であり難所でもあった。

鍾ヶ岳の裏山には、火付け木用の硫黄があり、里人はこれを探って柴ざりに乗せて曳き下し売り出していたが、或時六左衛門も仲間と一緒に硫黄を産する朱殿坊山へ、鍾ヶ岳を越えて採りに行き南股の雪深を曳き下して来たが、難所の大滝を前に柴ざりに腰を下して一服している時だった。この日は天候が悪くガスっていたので見通しがきかなくなつたので、後から下りて来た柴ざりの一人が、目の前に六左衛門の姿を発見した時にはもう遅かつた。あつて、ブレイキをかけたが間にあわず、アツという間に六左衛門はそりもろ共後からのそりに押されて滝壺へ落ちてしまった。

仲間一行はなんとか助けようとするがどうすることもできず、六左衛門は三日三晩滝壺の中から助けを求めて叫び続けたが、ついに力つきて泡の中に消えて行つてしまった。

坊主の岩小屋

上高地から槍ヶ岳へ登るルートの槍沢の上部に坊主の岩小屋と呼ぶ岩屋がある。

この岩屋は、文政十一年播磨上人が初めて槍ヶ岳へ登つた時利用したので名付けられたもので、赤沢の岩小屋からさらに登り、中岳

や大喰岳の見えるお花畑の中に入り、入口は九尺ばかりだが中は二間四方もあり、播磨は初登頂の時、この岩屋にこもり念仏三昧に明け暮れ、晴れた時には槍ヶ岳の絶頂に登り御来光の奇瑞にたびたび恵まれ、四十八日間の別時満願も無事に終え、里に下つた。

こうしてついに大願成就した播磨は、「わかれてもまた逢いぬらん極楽のひとつこの蓮の友と思えば」という歌を唱えつ、決別を惜しむ村人に再会を約して、再び布教の旅に旅立つて行つたという。

おかるの穴

今は梅池スキー場から自然園への車道が完成し、通る人も少なくなつたが、その昔は千国街道を経て落倉から赤坂へ出る道がもつぱら利用されたものだつた。

その千国街道が桶川を渡る瀬戸の橋は、兩岸の絶壁に架けられた高い橋で、この橋の下に岩壁には一つの岩穴があり、昔からおかるの穴と呼ばれて知られている。

昔近くの切久保という部落のある家に、おかるという嫁が来た。初めは家中仲睦まじく暮らしていたが、慣れるに従いおかるの嫁いびりが始つた。ついにがまんできなくなつたおかるは、或晩、今夜こそおかるを驚かし日頃のうっぷんを晴らしてやろうと、一計を案じ、氏神様の宝物で秋祭りの行列に使う七道の面の一つの鬼の面を神社から持ち出し、これをかぶりおかるの寝床の隣りの部屋からおかるを呼び起し、「日頃お前は嫁のおかるをいじめているが、今夜は俺が代つてその怨を晴らしてやるゾ」とおどした。目を覚ましたおかるは恐ろしい鬼が障子の穴からのぞいているのを見て絶絶してしまつた。おかるは計略の当つたのを喜び、面をどうとうとしたがこれは如何に、面は顔にくつ

上高地線の車道は島々部落に入ると、梓川の谷も急に狭ばまり、その川沿いの道となるが、明治の終りこの車道が開かれる前の道は、今の役場の前から川の右岸に渡り、橋場部落を経るもので、この橋は雑食橋と呼ばれ昔から名橋として知られている。

それは一つにはこの橋は川中に橋脚を持たず、兩岸から刎木を幾枚かせり出させ、最後に中央に行桁を架ける珍しい橋であること、二つにはこの橋が十三年目の寅年各に架け替えを行うが、その時行桁の先に、この橋誕生伝説の「せつ女」と「清兵衛」を形取つた人形を飾る行事である。

昔、島々に清兵衛とおせつという若者があり、おせつは口減しのため対岸の橋場へ奉公に出ること、なつた。その頃橋は四里も下流にしかなかつたので、二人は夜毎しめし合せて岸に立つたが激流にさいなまれ恋のさ、やきも充分できない。そこで二人は噴気し、三度の食事を二度に減し、雑炊雑穀に切り変え架橋資金を生み出すべく努力した。

やがてこのことが村人の知るところとなり数年後には両村の人達も共にその不便と必要性を感じ、ついにここに目出度く橋が架けられたのであつた。

(白馬村役場・山博調査員)

博物館だより

- ・ライチヨウ寄付金
- 一〇〇〇円 兵庫県西宮市分銅町六一二
- 三〇〇〇円 東京都練馬区貫井三二四五

安藤正哉殿

一八 岡村正子殿

山と博物館第23巻第6号
 一九七八年六月二十五日発行
 発行所 長野県大町市TEL026-211
 印刷所 大町市 大町山岳博物館
 大町市 大町山岳博物館
 大町市 大町山岳博物館
 定価 年額 八〇〇円(送料共)(切手不可)
 郵便振替口座番号(長野二、一九三)

雑食橋